

を見ると、この冊府元龜や通鑑の城主といふのが石萬年であつたことは疑を容れない。かくこの城主が胡人で、而してその姓が石氏であつたからには、これを西域石國即ちタシュケンドの人と見て殆んど譌無からうと思ふ。前項にはロプノールの南方地方に貞觀中から康國の人が首領として臨んだことを見たが、同じ時代にその東方の要地なる伊吾即ち今の哈密も、また石國人によつて治せられて居つたことを知り得るのは面白いことである。第45—48行にかけて、この地に置かれた伊吾縣の風俗を記した中に、特に「商販之人」あるを言ひ、また「唯以多財爲貴」と述べてあるのも、かゝる事情を考へ合せると、一層適切な解釋を得ることが出来るであらう。

四、當時この伊州に居つた民族に關して、殘卷にはなほその第38行に「羌龍雜處」といひ、また第80行に「龍部落本焉耆人、今甘・肅・伊州各有首領、其人輕銳、健鬪戰、皆稟皇化」というて居る。羌については大體チベット人種と見ることに於て異論ないが、龍というものについては余の知る限り從來あまり論議されなかつたやうである。併しながらこの名はこの地方に關する史籍や文書には屢現はれて來るのであつて、例へば新五代史卷七十四、四夷傳の回鶻の條には

又有別族號龍家、其俗與回鶻小異

と見え、敦煌石室の遺書張氏勳德記殘卷²⁰には

河西剋復、猶雜蕃・渾、言音不同、羌・龍・嗚末、雷威摺伏云々

と見え、その常樂副使田員宗の啓にも九回まで龍家という語を繰り返し、スタイン氏の同じ石室から得た咸通九年